

あとがき

共同研究者 河野 通明

「民具の名称に関する基礎的研究」班は本巻の〈民具名一覧編〉と来年度の〈地域呼称一覧編〉の作成を目標にスタートしたが、初年度から4年目までは地域担当者に発表してもらっての意見交換という形で〈地域呼称一覧編〉の作成を中心に展開し、〈民具名一覧編〉の検討は後回しになっていた。それではまずいと気付いたときには最終年、そこで〈地域呼称一覧編〉の執筆から外れた関東在住のメンバー通称「東京班」に急遽割り振って何とか仕上げることにした。いざ一覧表作成に取り組んでみると自分が研究してきたのはごく一部にすぎず、実は何も知らないことを痛感させられる結果となったが、いま民具の置かれている状況からすれば、ベストは望めなくてもベターな試案を世に送り出すことが大事である。そう考えてわれわれは取り組んできた。

「民具」という言葉は民具研究の創始者の渋沢敬三らのグループが彼らの研究対象を呼ぶために作りだした造語で、民具とは「我々の同胞が日常生活の必要から技術的に作り出した身近卑近の道具」（『民具蒐集調査要目』1936年）と規定したが、それから78年、平成の大合併の結果、だぶった民具の廃棄が聞かれるなかで博物館・資料館・教育委員会の文化財担当者の間では「民具をなぜ守るか」「どう守るか」が話題となっている。この現場で交わされる「民具」の用法から帰納法で規定し直すなら、

民具とは、現役を引退して地域社会の歴史や暮らしの語り部となった庶民の道具類。となろう。地域住民は使わなくなった民具を、地域社会の歴史や暮らしの語り部となることを期待して博物館・資料館・教育委員会に寄贈した。博物館・資料館・教育委員会の文化財担当者や研究者は、この期待に応じて民具から地域社会の歴史や暮らしの情報を引き出し、それを地域社会に還元して地域の活性化に繋げなければならない。

民具はこれまで「有形民俗文化財」であり「民俗資料」と捉えられてきたが、民具には地域社会の成り立ちに関わる縄文・弥生・古代にまでさかのぼる歴史情報が圧縮保存されていることが最近明らかになってきた。民具は「有形歴史民俗文化財」だったのである。ところで民具は地域社会の歴史や暮らしの語り部だとはいっても、日本語で話してくれるわけではない。この物言わぬ民具から歴史民俗情報を引き出す手だてが広域比較である。

民具はさまざまな地方名で呼ばれているので、比較研究のための第一条件として学界の共通語＝「共通名」が必要となる。この共通名の可能性を探るのが「民具の名称に関する基礎的研究」班の一つの仕事だった。広域比較の必要性は古くから唱えられ「標準名」が模索されてきたが、この言葉には「標準名が上位、地方名は下位」という上下関係のイメージを伴うからか学界内でも反発は強い。それなら広域比較のためわれわれが求めている名称は「共通名」と呼べばいいのではないか。共通名の策定は簡単ではないが、〈民具名一覧編〉の担当メンバーは、その方向性をもって模索しつづけてきたことをお伝えしておきたい。

広域比較の第二の条件は、博物館・資料館・教育委員会に寄贈された民具群が整理されて写真入りカードが作成され、それが公開されることである。民具の整理、カード作りは気の重い仕事だが、「この民具は何という名前でも何に使うのか」について、手頃なハンドブックがあれば助かる。〈民具名一覧編〉はその現場で使ってもらえることを念頭にわれわれは取り組んできた。載録する民具の取舍選択の基準の一つとして「収蔵庫でよく見かけるもの」を配慮したのもそのため、民具研究ではあまり関心は向けられないものの収蔵庫ではよく見かける近代民具は収録するよう心掛

けたのもその一環である。

話を「共通名」に戻せば、誰かがどこかで決めるのではなく、学界・研究界に誰かが提案して、それをもとに気づいた者が修正を加えて学界内で成長していく形が望ましいと考えていて、この〈民具名一覧編〉はそうした提案を含んだ試案のつもりでわれわれは執筆してきた。

これまでも『日本民具辞典』（1997）、『多摩民具辞典』（1997）、『絵引民具の事典』（2008）や各博物館の民具図録など優れた作品は多いが、収蔵庫の民具は多様なので、参考文献は多い方が心強い。民具整理の現場でこの〈民具名一覧編〉をその1冊に加えてもらえれば、われわれとしてはこの上ない喜びである。さまざまな形で民具に関わる一人一人が自分のポジションと役割を自覚して連携を深め、民具から歴史民俗情報を引き出して地域起こしの現場に還元し、民具に携わる者としての責務を果たしていこうではないか。